

八月中旬以後のこと

第三十二軍各島嶼防禦要領

各島嶼の兵力配置は固定配備とし相

互間の兵力機動は之を期待せず各島

嶼の防禦方式は概ね左記要領に依る

1. 沖繩本島に於ては決戦を企図する

2. 宮古島に於ては持久を主とし状況

特に有利なる場合攻勢をとる

3. 爾余の島嶼守備隊は持久に専念し

効めて永く所在航空基地を敵に使

用せしめざる如くす 従つて其の
兵力配置は地形に適合せしむると
共に兵力を集約し且洞窟築城を徹
底的に利用する固守防禦の方式を
採用す
二六頁七行より二七頁九行迄に對する所見
台北會議の状況
大本營考謀服部大佐、台湾軍考謀長諫
山中將以下合軍主要考謀会同す 予は
長考謀長の指示に従ひ、意見申書を提

示したるのみにして多くを主張せざり
き然るに方面軍参謀は第三十二軍支
り一兵団を抽出することにて懸る強硬に
して然も之を固軍決戦場たる比島に攫
供せず台湾本島の増強に使用せんとす
る意志明瞭にして予は頗る奇異の感に
打たれたり
状詭迫するや各島岫の守備部隊は自
己の島が最危険なるが如き錯覚に陥り
大局の判断を誤る通有性あり

二八頁二行より八行迄に對する所見
方面軍又は大本營は作戦警起前特に発起
後屢々軍の作戦の内容に就て注文を一つ
強引な指導に任じたるも不思議なること
に天号作戦以後第三十二軍に對して的確
なる任務を全然附与しあらず軍の任務と
して當時効力の存したるは昭和十九年四
月一日第三十二軍新設の際与えられたる
「南西諸島を防衛するに在り」の項のみ
なり

三〇頁五行より三一頁一〇行迄に對する所見
結の果論より世の第^三案を採用しあらば敵
の上陸を破^碎し得たるべし 戦後十年を
経たる今日に於ても當時作^戦計画の立案
に任じたる子として^殊念に思ふことなき
にし^もあらざ^らず 本案を採らざ^らば奉書
部^述の理由に依るの^外當時^九師團を抽
出せられ然も徒^末の^作戦準備は水泡に帰
し我が海空軍の^戦力多く頼むに足らざる
を痛感したる際とて^決戦の^意態は弱^化し

戦略持久の考えが支那的になれるに依る
ものなり
三四頁一行より三六頁九行迄に對する所見
作戰主任參謀が「北中飛行場方面に攻勢
を取らざるとの方針が軍司令部内は勿論
關係上級司令部にも徹底せりと思考せる
は独り合莫の嫌いありき 長野參謀が當
時之に對し「北方に向い攻勢を取らず」
と大書して軍司令部のサインを頂上類に
して軍司令部に掲げ置く要ありと半ば會

誤的に具申せることあり事實際斗勃然後
の経過は甚の必要を實証せり 第三十二
軍が必要とあらば戦場を支配し得る實力
を有した作戦最初約四十日間に於て根
本方針が絶えず動揺し持久にも攻勢にも
徹底し得ざりしは結局戦いに幅む前の作
戦方針が上下の間に一致しあらずりした
起因す
何れにせよ作戦主任としての予は北方に
対して攻勢を取らざる方針に従い昭和中

九年末一第九師團抽出後、以來兵力配置
、陣地の編成及び訓練の企劃立案に任じ
たるものにして、軍司令官、参謀長は勿論
若き参謀諸君も此の方針に就いて一臆の
疑議なき筈なりしに事志しと異なるに至り
しは原因何處にありしや不審に堪えざる
ところなり

又大本營や方面軍も軍の作戦方針は十分
承知しありたる筈にして若し其の意圖に
合せずとせば、何故作戦準備の初期に於て

断乎之使命せらるるは、予として、孤立無援の敵島の
作戦、陸海空に於て、絶体優勢なる敵に對
する作戦に於ては、野戦の運動戦とは全然
異なり、準備の周到、築城、訓練、戰略戰
術上の考察等）にのみ、其の希望を思い出
し得るとの信條なりき。従つて思ひつき
は、つたりの無準備無計画の行動には到底
同意する能はずりき。

六五頁一。行より六六頁三行迄に對する所見

敵太平洋艦隊司令長官の図説録には濠川
正面に陽動状況に依り有力なる一部を以
て上陸を實行する企圖を存せりと記録し
あり又戦斗中破壊せる敵戦車に遺棄せ
られし敵文書にも此の計画を裏書するも
のあり
七〇頁六行より七一頁五行迄に對する所見
本項（七〇頁六行より七一頁五行まで）
の如き事實なし

四月三、四日頃より軍司令部内に攻勢を

取らんとする空気が招き来れるは事實
なるも四月六日の攻勢案を決定したる記
憶をし予は殊略持久の一大方針を堅持
し明鏡止水の境地にありて予期したる如
く攻事し来たる敵に對し予も準備したる
とこを以て断乎對抗せんとする覚悟を
りき
七一頁一三行より七一頁八行迄に對する所
見
四月五日頃に移ける敵の兵力判断

沖繩島南部軍主力方面の敵は茅二十四
軍団を中心とする二乃至三ヶ師団
沖繩島北部各護方面の敵は海兵茅三軍
団の一ヶ師団
嘉手納上陸兵附近に約一ヶ師団控置
総戦後予が敵茅十軍団を謀り、大佐と
会談せし際四月八日の我が軍の攻勢計画
を固き米軍の之が対策としては茅二十四
軍団を以て直接戦に對せぬ此の間北方面
三軍団を招致して日本軍を破すべしと

語水リ

七三頁二行より九行の間には村中なる所見

第十方面軍より受けたるは命命にあらす

して訓令なり

四月六日攻勢は決定しあらざるを以て之

を中止する事案なり 濃川正面に對す

の敵の上陸企圖は根拠と成りしとあるも

軍の該方面に對する作戦企圖は根拠の文

字を以て表すような軽々たるものにあらす

同右に對し四月八日攻勢に因する予の固懸

軍の北、中飛行場の使用を妨害し連日出
動する我が忠勇なる特攻勇士をして遺憾
なく其の任務を完遂せしむべしと我々
は毎夕毎朝「ト口」の轟音送葬曲裡
に米艦船に突入散華する無数の特攻勇士
には心から敬意を表している然し此處
戦場の地上部隊は特攻勇士の数十倍の人
員を以て毎日急造爆雷を抱えて敵戦車に
必死の突進を行いつゝあるのだ。予は直
ちにへソを取つて「地上部隊幾千の将兵

が連日祖国の爲に殉じつゝある冷厳なる
現実に至つて軍は既定方針に従ひ貴意に
副う如く努力しありしと返響を起草した
特設第一旅隊の澄乱、独立歩兵第十二大
隊の後退米軍の迅速なる地歩の獲得が中
央の神経を苛たしたのが四日、五日と
大車宮及び北方面軍から相次ぐ革命的存在
訓電が飛び込んた方面軍の電文中には「
今にして貴軍が北方に向ひ出番せざれば
遂に任務達成の機を逸すべし」との訓諭

的なる文句が附記してある其の意味は明
瞭な付ないが恐らく米軍が北、中飛行場
を占領せば爾後南進して軍主力を攻撃す
ることなぐラフーゲンビル島の場合の如く
是等飛行場を利用して直ちに日本本土へ
の進軍を開始するさすれば第三十二軍
は手を拱いて任務を放棄したことになる
と解すべきだろうか勿論斯かることば
總無とは断じ得ないだろうが強んど有り
得ない極めて少い公算の爲に輕挙妄動し

へ全軍を覆滅させるような事は通為とな
 ず
 軍司令部内に於ても攻勢を取るべしとの
 空気に次第に濃く予に對する反感は激しく
 なる評りである 軍司令部、参謀長とし
 ても甚の立場上どうしても攻勢を取らね
 ばならんやうな雲行まじである 予は方面
 軍、大本營の電報を参謀長、軍司令部に
 御覽に入れると共に平素からの軍の方針
 に基き攻勢總体反對の意見を申上げた

予は断乎反对した 軍は越え次前から戦

た

木村、神、薬丸、三宅、長野、悉く同意し

心各各謀の意見を求められた

蘭世攻勢に同意を強要するかの如き調子

した 爰少将は方面軍上りの境文を讀み

四月五日の夕刻参謀全員参謀長室に集合

た

が 航へ幕僚会議を催するより申渡す水

両将軍は予の意見を固き流して居る水は

略持久の方針を確立し過去数月間此の線
に従い全力を傾注して作戦準備を進めて
来長米軍は予想した地実の上陸し予期
した如く南進してある此の時、此の
降何故に出し抜けに根本方針を変更する
必要があるうう脱線だ
米軍は既に五ヶ師団内外の兵力を上陸せ
しめ海空より我を圧倒して怒濤の如く
進襲してある此の米軍に對し軍主力が
平素の準備全然なまゝに急遽攻勢を取

つても中頭、島尻の接合部をなす巾員三
、四料の狭隘部を猛襲を受け全軍数日を
出せずして覆滅するものと明瞭である
軍が上陸して態勢未だ^だ整はざるに乗じて
出撃するなうば^ば多少話^が判^るが既に其の
様は遠く逸して^{いる}
斯く述べて予は攻勢には絶体反対であり
ますと結^んだ^だ
長將軍は予と論議を交うることなく^多
数決に從い幕僚会議は攻勢と認めらる^今

より軍司令官の決裁を受けるから今度集
合の際には服装を正し略授を佩用せよと
申し渡しられた
軍司令官の決裁は受けぬ前から明瞭だ
萬事休むとある約三十分の後には我々は
威儀を正して司令官室に集合した
軍司令官は不動の姿勢で一同に對して
軍全力を以て此、中飛行場地区に出発す
るに決しました
と申し渡しられた

予は煩悶遣るかたもなかつたが茲が考謀
の難しいところを昔から多く先輩から
教えられたところだと極力観念し此の夜
徹夜で攻撃計画を立てた
予は計画立案後自室で静に冥目し軍の攻
勢推移を想察しただう考えても全軍十
万の將兵は前田、仲間の線以北島袋東西
の線以南の狹隘地帯で太平洋艦隊の主
力一千機を越える其の空軍既の上陸せる
敵地上部隊数ヶ師団の集中攻撃を受け據

るに陣地なく隠るゝに所なき裸の状態を
悲壮な最後を遂げる地獄園絵の如き惨状
が想見される各兵団が昨夏以来奮勵努
力した作戦準備は實に今日の為にあつた
然るに此の助力を一朝にして放擲し徒手
空拳敵と戦わんとするは狂氣の沙汰であ
る今から云ふも遅くはないと予は物の怪
に憑かれたようになり参謀長室に向つた
参謀長室には軍司令官も同席して居ら水
たか涙を流して意見を述べ予を半ば費

まように半ば憚るように注視して居られ
たが互に顔を見合せたまゝ一言も発せら
ずかつか
六日廿二十四師団長雨宮中将は木谷参謀
長を帶同し弾雨を冒し無事軍司令部に到
着之水は牛島将軍は参謀長と手を立会
せしゆ雨宮師団長に其の決心及び攻勢一
般の要領を口達せられたるに好し雨宮中
将は欣然全力を傾け之攻勢に參加する旨
言明せられた

左師団長は感慨深げな静かな調子で予に
 向い腹の裡を打明けられ、此の度の
 攻勢に於ては師団は敵の砲撃に制せられ
 砲兵は勿論歩兵の重火器も追隨せざる
 こと至難である。結局白兵と小銃のみで
 敵の外はない。難しい戦だ。予は自
 らの主張が又もたげ乙束で遂に「私も同
 意見です。閣下が云う御意見でした
 」。至急軍令に御話しなすら如何に
 可しと言つてしまつた。

第六十二師團長は師團司令部附近に砲
が盛んに落下してゐる。今暫らく極
を駭いた。この事心作戦主任の北島
が先ずやつて来た。彼は沈痛な面持ちで
今更何故の攻勢ぞとばかり平素の重厚な
性格に似ず不満の態である。予は意見が
あれば軍号謀長に申上げたいと勧めた
西岳団に攻襲計画を達せし水乙向もなく
幸か不幸か百數十隻よりなる敵の輸送船
団が沖繩島に近接中との電報が入つた。

予は大急ぎで駆けつけ折から軍司令官室
前の坑道を歩いて居られ参謀長を呼が
止めて電文を讀み上げたり一瞬将軍の表
情が崩れた参謀長は宙を泳ぐやうな弱々
しい態度で「此の新来の米軍は軍主力が
出島する頃に戦場に到着する若し我が
側背にでも上陸されれば危い高級参謀
攻勢は中止することにしよ」と申され
た軍司令官は常に参謀長の意見通りで
あるあつさり攻勢を止めることに同意

さ水たほつとしを思いの争は早速方面
軍及び大本營宛左記電報を起草した
敵の新なる大輸送船団は近く沖繩に到
著せんとしあり甚の上陸方面は予断を中
許さず依つて軍は四月八日攻勢を中
止するに決せり
七七頁四行より八行までに對する所見
此の敵情を入手せる際は高級参謀は既に
攻勢を覚悟しありしを以て単に敵情を軍

参謀長に報告し長るのみにして左翼の危
復々攻勢中止等の意見は具申せす
七八頁五行より七行までに対する所見
軍高級参謀として斯かる攻勢案は研究せ
ず
八一頁七八行に對する所見
四月十二日夜襲の予の回想録一部抜萃
軍の上層部が攻勢論を動搖して居る間に